

決して選ばなかった

アラー・マフディー・クディイハ 2025年4月10日

喪失

頭上にはガザの空が
重く、静まりかえっている。
足元の海岸には
手の届かない青い波。
その狭間に閉じ込められ、私には
この身を我が家へと運ぶ翼もなく、
安全へと引き込む深みもない。

立ち往生

あらゆるものの中真ん中に——
私、人々、命、
そしてジャバリアキャンプの
狭い路地から盗まれた過去。
私たちの現在は瓦礫の山の上に揺れ、
私たちの過去はその山の中に沈み、
私たちの未来はきらめいている
越えられぬ壁の向こうで。

彷徨う

父のオリーブの木々へと続く道はなく、
終わりのない検問所を抜けてゆく力もない、
その痛みに対してひどく狭い土地で。

傷跡

私は選ばなかった——
アル・シャティの石に刻まれた運命を、
弾丸や爆弾、封鎖によって
書き記された歴史を。
私はその物語を背負っている、
自らが戦ってはいない戦闘の
傷跡として。

消失

過ちでも選択でもなく、
この足元から大地を奪った手によって。
国境に辿り着いたとき、

彼らは私から名前さえ剥ぎ取った——
パレスチナ人でも、女でも、
人間ですらないと。

オリジナル（英語）<https://wearenotnumbers.org/i-never-chose/>

（翻訳：藤田ヒロシ 2026.1.23 改定）

打ち碎かれた安らぎ

ハラー・アル・ハティーブ 2025年4月16日

夕暮れ時、屋上にひとり
空を見上げる。
冷たい風がそっと顔に触れ
その時間は優しく、そして叙情的だ。

一瞬

まるで宇宙のすべてが自分のものになったかのように
空——私の空が
強く、そして優しく
抱きしめてくれていて
私をこの上ない幸福感に満たす。

けれど

その幻想が五分と続かないうち
ファイルーズの「カナダの小さな家※」を歌いながら
新しい人生を夢見て
その美しさに浸っていると
爆発音が私を遮り
歌を打ち碎き
澄んだ空を
一瞬でくすんだ灰色へと変えた。

そして

何の前触れもなく
思い知らされるのだ。
どれだけ必死に、遠くへ
せめて想像の中だけでも飛び立とうとしても、
その声が私を追ってきて
現実に引き戻すのだと。

それがささやくのが聞こえる——
恐怖はこれからも私の伴であり続け
この時間に
ここにひとりいることは
安らぎではなく
危険なのだ、と

オリジナル（英語）<https://wearenotnumbers.org/shattered-serenity/>

（翻訳：藤田ヒロシ）

※レバノンの伝説的な歌手 Fayrouz (ファイルーズ、فيريوز) の代表作ひとつ。原題は「بيت صغير بكندا」（意：カナダの小さな家）で、その発音をローマ字転写した「Baytee Zgheer (バイティー ズギール)」と、配信サイトなどでは表記されている。この詩の中では原題の英訳である「A Little House in Canada」 と書かれている。

パレスチナは語る

匿名 2025年4月27日

占領者よ、誇るな
 私は、パレスチナだ
 1948年から
 お前たちは 私を罰し続けている
 子どもを殺し、若者を、老人をも殺し
 拘束し、殺害し、
 そして 忘れている
 空には神がいることを
 お前たちの上に
 私の大地の上に
 私たちすべての上に
 神は見ている
 お前たちが隠す罪を
 神は見ている
 流れる 清らかな血を
 神は見ている
 すべてを 見ている

国々は お前たちの行いを支持する
 そして私は 両手を天に差し上げ祈る
 お前たちは言う
 「イブラヒムとその子孫のための土地がほしい」と
 だが それはお前たち自身のため
 敗れた お前たち自身のためではないか
 お前たちは 爆撃し、銃声を響かせ、殺し、脅す
 ポンッ、ズズッ、パン——
 空から、ヘリコプターで、ドローンで、
 恐怖が降ってくる

でも 私には神がいる
 だから 好きにするがいい
 私とパレスチナ人にとって
 お前たちの否定は 私たちの平和
 お前たちの窒息は 私たちの呼吸
 お前たちの恐怖こそ 私たちの勝利だ
 私を手に入れようと 必死になるがいい

だが そのたびに私は立つ
誇りをもって
強さと勇気を胸に
私は言う——
「私はムスリムだ」
そして はっきりと
『ノリ・メ・タンゲレ※』——私に触れるな

お前たちが攻撃するたび
私たちは立ち向かう
私たちは 石で戦う
お前たちは ミサイルを撃つ

占領者よ、誇るな
パレスチナは——私のものだ

オリジナル（英語）<https://wearenotnumbers.org/palestine-speaks/>
(翻訳：藤田ヒロシ)

※「ノリ・メ・タンゲレ (Noli me tangere)」はラテン語で「われに触れるな」という意味です。イエスは復活後、マグダラのマリアにこの言葉を語りました。

最後の別れ

ハラー・アル=ハティーブ 2025年6月21日

あなたは「待っていて」と言った
私に戻ると約束した

そして、あなたは戻ってきた
でも、それは
白い布に包まれ——
私にはもう見ることが出来ない
愛した魂のない
あなた

ねえ、私の愛しい人はどこ？
あなたに会いたい
あなたの顔に触れ
あなたに最後のキスをしたい

あなたを抱きしめたい
あなたを温め
あなたをこの心の中に隠したい——
あるいは、私があなたの中に隠れてしまいたい

私は白い布に手をのばす
あなたの手に触れたくて
婚約指輪にキスをしたくて
あの頃のように

でも……
あなたの手はどこ？

あなたの香りを感じたい
それは、あなたがそばにいる証で
私が守られている証なの

けれど今、私に届くのは
あなたの血の匂い

私は白い布の上に伏せる
そして、ささやく——

「いつ帰ってくるの？」
食事はできている
子どもたちも、あなたを待っているの

ねえ、愛しい人、教えて
どうして、だれが、こんなことをしたの？
あなたは感じていたの？
いつものように私の名前を呼んだの？

もし知っていたなら——
あなたを決して行かせなかつた
もっと長く
もっと強く抱きしめ
あなたと私の鼓動を重ね合わせて
どれだけあなたを愛しているか伝えた

愛しい人
なぜ黙ったままでいるの？
本当に、もう戻ってはこないの？

それなら——
私の心を連れていって
そして、待っていて
私もきっと、すぐに行くから

オリジナル（英語）<https://wearenotnumbers.org/our-last-goodbye/>
(翻訳：藤田ヒロシ)

皮と骨

ファラ・サーメル・ザイナ 2025年9月13日

彼女——それは夢だった。

希望だった。

宝物だった。

九か月、胎内に抱いた母にとって。

二人を養うため、世界を背負った父にとって。

「きっと先生になるわ」——母は言った。

「次の世代を育てる人に」「医者になるだろう」——父は笑った。

「年老いた私の腰を治してくれるような」

母は微笑む。

「芸術家になる。この壊れた世界に、色を取り戻す人に」

導き手に。

光に。

かけがえのない友に。

二人は、そう願った。

九か月 戦争を経て——子は生まれた。

細い指。

やわらかな鼻。

淡い桃色の唇。

笑い声と泣き声が証明した。

彼女は確かに生きていた。

けれど、その身体は——皮と骨ばかりだった。

十九か月の戦争と飢え。

母の身体もまた、皮と骨へと変えた。母乳は出ず、母は自らを責めた。

「この肉を削ってでも、ジャナーンの身体に与えられたなら…」

母は見守った。

娘が日ごとに薄れていく姿を。

機械の音に繋がれ、

最後の息を吐き出すその瞬間まで。

母は祈った。
 奇跡よ、ふたたび瞳を開かせてくれ。
 祈った。
 胎内に戻してやりたい。
 世界の残酷さから隠してやりたい
 戦争という名のない世界に。
 死が「イスラエル」と呼ばれぬ世界に。
 その時にこそ、生ませてほしいと。

母は口づけた。
 鼻に。
 閉じられた瞳に。
 小さな指に。冷たい頬に。

涙で洗い流した。
 首筋の香りを胸いっぱいに吸い込んだ。
 最後の抱擁をして、見届けた。
 大地が——まだ自分の名前すら知らぬ娘を飲み込むのを。
 今や母は、娘の墓を心に抱く。
 そこは生きた墓標。
 寒さも、孤独もない場所。
 「どこへ行くにも、あなたを連れてゆく」——母は誓った。
 「あなたと共に年を重ねる。同じ年ごろの子どもたちを見ては想像するの。

いまごろ——あなたは騒がしい十代の少女。
 ——卒業式のガウンを纏っている。
 ——輝く花嫁になっていたでしょう」と。

ジャナーン——
 母と父にとって、地上の天国となるはずだった存在。
 ジャナーン——
 だが、イスラエルは時を奪うように、
 彼女を奪い去ったのだ。

スクロール —— You Scroll

匿名 2025年10月14日

あなたは、スクロールする。

水を運ぶトラックを、
小さな子どもが追いかけている。
その静かな追走の中で、
あなたの心が一々碎ける。

あなたは、スクロールする。

父の亡骸にすがって
泣き叫ぶ子どもを見て、
胸の奥に、重く、生々しい痛みが広がる。

そして、スクロールする。

飢えで骨と皮だけになった子どもを見て、
魂の奥を、何かがかじる。
視界がかすむ。
息が詰まる。
あなたはスナックをつまみ、
何も見なかったふりをして——
スクロールする。

炎に包まれるテント。
燃える赤ん坊。
涙が、思わずこぼれる。

あなたは、スクロールする。

空腹を満たそうとして倒れた
母と父。
その顔には、
声にならない絶望が刻まれている。

あなたは、感じる。

ほんの一瞬——感じてしまう。

けれど、

また、スクロールする。

そして、また。

感じることが、

雑音になるまで。

死が、

ただの映像になるまで。

苦しみが、

アルゴリズムが好むコンテンツになるまで。

あなたは、

もっと、を求め続ける。

彼らは、

——慈悲を求め続けている。

オリジナル（英語）<https://wearenotnumbers.org/you-scroll/>

（翻訳：藤田ヒロシ 2026.1.20 改定）

虐殺の子守唄

ジェームズ・ローチ

彼らは抱きしめる、埃をかぶった、
虚ろな瞳の赤ん坊を。
祈りを唱え、
苦痛に叫び、
出口となる傷を探す、
小さな体に、
それを留めようと、
血の川が通りを濡らしていく。
深呼吸など存在しない、
激しいうねりと深い悲しみの拷問との間に。
彼らの苦しみは翻訳では失われず、そこにある、
死の糸に覆われて。
岩のジャングルジム、
埋もれた家族たち、
爆弾の刃で半分にされた病院、
飢えた乳児が孤独に息絶える、
虐殺の子守唄の中で。
碎けた心の紙吹雪に、
祝うべき理由などない。

オリジナルを含む [Letters To Gaza \(全編／PDF\)](#)

(翻訳：藤田ヒロシ)

都合のよい共感

エリーゼ・カミングス

毎日

ソーシャルメディアで

パレスチナの悲しみの

投稿を目にすると

これらのコメントを見かける

「これが戦争だ」

「行動には結果が伴う」

「ハマスを非難するのか？」

時々、その人たちのプロフィールを

クリックしてみる

理解しようとして

一体どんな人が

こんなにも無関心でいられるのか

スクロールする

そのタイムラインを通して

残酷さの合間に

動画がある

救助される傷ついた動物の

病気の子供への寄付の呼びかけの

そこには 心からの共感があふれている

それなのに

どういうわけか

その共感をグループに広げない

プロフィールの一番上に戻ると

自己紹介にこう書いている

「共感力が高い」

「動物好き」

「だた優しくあれ」

綺麗な言葉

空虚な約束

オリジナルを含む [Letters To Gaza \(全編／PDF\)](#)

(翻訳：藤田ヒロシ)

あなたは死に、私は生き残った

この詩はパレスチナの二重国籍者が抱える生存者の罪悪感について、Refaat Alareer の『If I must die』への応答として書いたものです。

サラ・オリエ

あなたが望んだように 私はあなたの物語を語り継ぐために生きてきた、
私が約束した希望は あなたの持ち物とともに瓦礫の下で眠っている、
それでも 私は布と糸を買った。

あなたの帆を揚げながら、私たちの物語を遠くへと伝えている、
この痛み、罪悪感と激しい怒りが完全に消えることはないと知りながら。
それでも、この重荷を介して、
愛と希望のための余地を見つけ この憎しみに立ち向かうことができる。
私たちの記憶は埃の中に押し潰されてしまった
だけれど 正義の新しい物語は絶対に必要。

この詩が終わる頃には、
私はその約束を果たし希望となる、友よ。

オリジナルを含む [Letters To Gaza \(全編／PDF\)](#)

(翻訳：藤田ヒロシ)